

3.11  
大震災  
特別企画

# 被災記：再生を目指して —大震災から 50 日

白鳥則郎(東北大学／公立ほこだて未来大学)



## 水仙の祈り

一輪の黄色の水仙を両手に抱いて、皇后さまが飛行機のタラップを降りてこられた。2011年4月27日、天皇皇后両陛下が被災地の宮城県を見舞われたあと、羽田に戻られたときのことである。この水仙は、避難生活を続ける女性が、この日の朝、流された自宅の跡地を見に行った際に、今年も花をつけているのを見つけて避難所に持ち帰ったとのことだ。震災の後で芽を出し、花を咲かせたという。「復興・再生」も、この水仙のように早く芽を出して花を咲かせてほしいと祈らずにはいられない。

## 大震災から 50 日

未曾有の大震災から50日目の4月29日、村井嘉浩宮城県知事は、この日を「震災復興キックオフデー」とすることを提唱、復興を目指し県内外に向けてメッセージを発信した。この日から仙台市地下鉄が全線開通した。まだ道路には凸凹が残っているものの、朝夕だけでなく日中まで続いた車の渋滞の緩和が期待される。東北新幹線も東京から新青森まで、ところどころで徐行運転しながらではあるが、全線復旧。しかしながら毎日のように余震が続いており、人心の回復にはもうしばらく時間がかかりそうだ。さらに津波に襲われた沿岸部の復興には数年から10年以上が必要となろう。

スポーツでも29日、プロ野球の「東北楽天ゴールデンイーグルス」とサッカーの「J1 仙台」が震災後初めて本拠地の仙台で試合を行い、ともに勝利を取めた。励ましの形は1つではない。完投した楽天の田中投手は、「声援が力に変わるのを初めて感じた」と語った。震災後、なにかと沈みがちの雰囲気の中

で、応援を通して一人ではない仲間がいる、といった連帯感と勇気を得た思いがする。

そう言えば、50年以上も前の小学生の頃、大阪を本拠地とするプロ野球チームが、最下位にもかかわらず、地元での人気の高いことが、どうしても理解できなかった。しかし、地元の仙台にプロ野球チームを持ち応援する今、ようやく「阪神タイガース」ファンの心情が分かるようになった。選手とファンの強い絆と連帯意識。それゆえに手のかかる子供ほど、かわいいのである。

## 本会創立記念日

4月22日は情報処理学会の「創立記念日」である。被災し忙殺されていることもあり失念していたが、学会事務局長から20日にメールが入り、「会長メッセージ」を、との依頼があった。早速、理事会と事務局のメンバへ向けて以下の文面を作成し送信した。

### 「会長メッセージ」

情報処理学会創立記念日(4月22日)にあたって  
—理事会・事務局のみなさんへ—

情報処理学会の新たな50年へ向けた最初の年に、1000年に一度と言われる大震災に遭遇した今、一人ひとりの生き方が問われています。

経済力では必ずしも十分とは言えないベトナムやバングラディッシュからも義援金が寄せられています。不条理な大震災に向き合う心情は、どの国の人も同じです。

本会も会員数の減少などで、経済力が十分とはいえません。しかしながら、4月の理事会で、「東

日本大震災復興支援運営委員会」を立ち上げ、本会として何ができるかを模索しながら検討し、身の丈に合った支援をすべく準備を進めております。

たとえば、私自身の例でいえば、この6月15日に開催される研究会における招待講演の謝金をわずかながら寄付。この5月からは東北大と企業の4社による共同研究プロジェクト「災害に強い情報通信基盤」を立ち上げる予定。また被災地における災害医療、農業、街づくりに「情報の視点」からお手伝いすること等々を進めております。

理事会・事務局のみなさんにも、各人の身近な担当業務において、すぐにでもできそうなアイデアを検討し、ぜひ下間事務局長まで申し出ていただくようお願いし、創立記念日の会長メッセージといたします。

2011年4月21日  
会長 白鳥則郎

会長メッセージに添えて、ささやかながら被災地から仙台銘菓を学会事務局へ送った。仙台から20日の昼に手配したところ、翌日21日の午後には東京に着くという。郵便など仙台からの運送業務も大分回復したようだ。

## 被災の分類

今回の震災による被災の程度は、(A)全壊、(B)半壊、(C)一部損壊、(D)軽損壊のおおむね4つに大別されよう。(A)と(B)は主として沿岸部で津波による大きな被害を被り、宮城県では4月29日の時点で死者8,793人(行方不明者6,541人)となっているグループ。(C)と(D)は主に地震による被害である。ここで、(C)は、建物の外壁や内壁にひびなどが入ったケースで、(D)は家財など屋内だけの被害。仙台市では沿岸部が(A)と(B)、中心部では(B)と(C)、内陸部が(C)と(D)に分けられる。地盤の強弱によって、中心部でも(D)に満たない、ほとんど被害のなかった地域もある。

## 復旧と助け合い

この3月まで、宮城県栗原市を実験場とする産学連携の「栗原グリーンプロジェクト(総務省、2010年度)」<sup>1)~3)</sup>を推進してきた。栗原市は、2005年に10町村が合併して誕生した。過疎と高齢化が顕著であり、高齢化率がピークを迎える2025年における日本の人口構成の縮図となっている。また、同市は2008年の岩手宮城内陸地震で大きな被害を受けた。そこで、このプロジェクトでは災害にも強い広域分散の高齢化地域において、省エネルギーと行政機能の向上・地域活性化の両立を目指している。

年度末の研究成果のとりまとめと3月28日のプレスリリースへ向けた準備に取り掛かったところで今回の震災である。プレスリリースは、すぐに中止とした。太陽光パネル、サーバなどの実験装置の状況を問い合わせたところ、ほとんど被害はなかった。栗原市の被害状況は、先述の分類でいえば(D)グループに相当する。4月に入って栗原市に電話を入れたところ、担当者は当面不在で連絡が取れない。聞けば、津波で壊滅的な被害に遭った宮城県南三陸町の支援のため出張中とのことであった。被害(A)の南三陸町の疎開先として被害(D)の栗原市が受け入れを申し出たのである。

このように被害が軽い(C)と(D)のグループは、被災者であると同時に、被害の大きい(A)と(B)グループへの支援者ともなっている。3年前、栗原市が岩手宮城内陸地震で大きな被害を被ったとき、南三陸町より温かい支援を受けている。お互い自分たちができる支援によって助け合い、共に生きていく21世紀の暮らしのあり方として、ここに「共生」のきざしを見る思いがした。

## 震災後の新しい社会モデル

明治維新、終戦に続く第3の復興・再生に向けて国の再興をはかるには、どうすれば良いのだろう。効率至上、自然征服といった姿勢を脱して人と人が互いに支援し合い、自然と調和する暮らしを目指す。そして、ボランティア活動を含め震災後に見受けられた支え

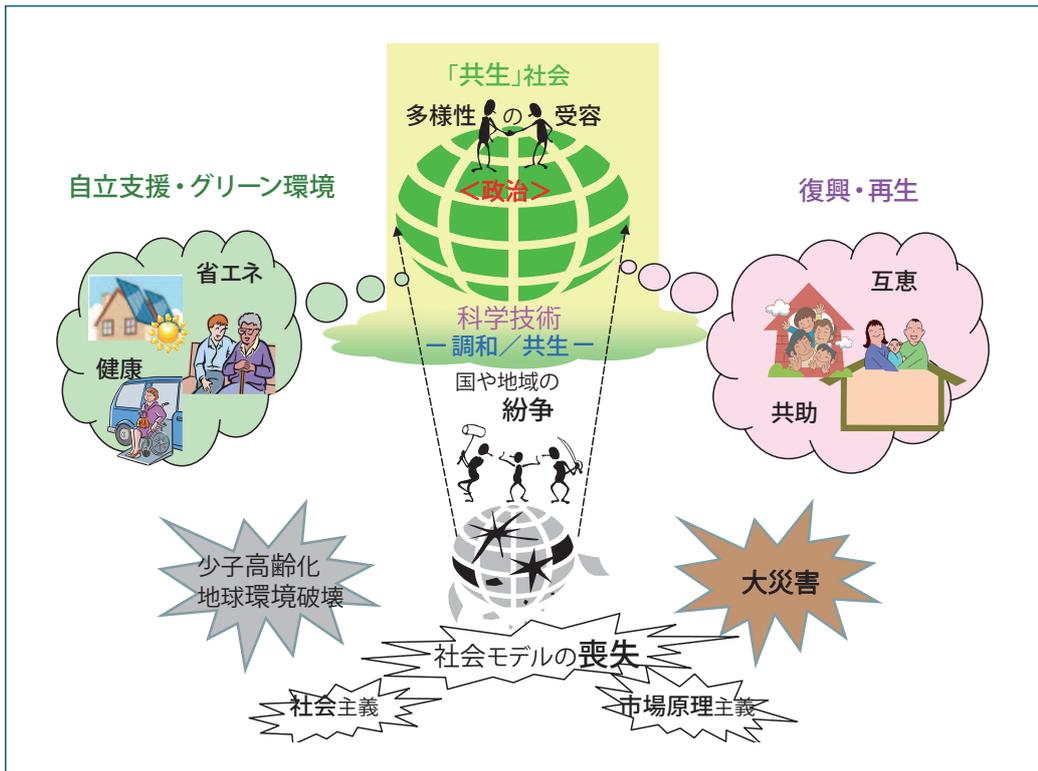


図-1 震災後の新しい社会モデルの実現に向けて

合う「互恵」をさらに深め、その延長線上に「新しい社会モデル」(図-1)を創生し実現できないものだろうか。

鎌倉時代、鴨長明は度重なる地震、津波を体験した。彼は、「方丈記」の中で、1185年の地震について「被災を契機に心を入れ替えても、時間が経てば人は忘れてしまっている」と語った。しかし、我々は今回の大震災を決して忘れてはならない。成熟し高齢化へ向かう先進国を先導する社会モデルの実現が、「3.11」を経た今こそ期待される。次世代に、持続可能な社会をバトンタッチするためにも。

## ● 身の丈に合った支援

私自身、今回の震災で被災レベル(C)となり、北海道、東京、京都の友人、知人から食料などの心温まる支援物資を送っていただいた。感謝している。今度は、私の番である。私の身の丈に合った形で大きな震災を受けた人への支援、さらに社会への貢献、奉仕を通して友人、知人への感謝にしたいと考えている。

会誌4・5月号の「東日本大震災と学会のこれから」<sup>4)</sup>に小生宅の一室が水浸しになった件を書いた。先日、畳と床の修理を依頼したところ、材料も人手も、全壊、半壊した被災者用の仮設住宅の建設で手一杯

であり、早くても半年後とのことである。仙台市では4月30日から入居が始まったが、仮設住宅を必要とする被害レベル(A)と(B)への対応を優先することは当然だ。このように、自宅など身の回りが完全に復旧はしていないが、当分、身の丈に合った自分にできる小さな支援と社会貢献を続けるつもりである。

## 参考文献

- 1) Shiratori, N., Hashimoto, K., Chakraborty, D., Takahashi, H., Suganuma, T., Nakamura, N. and Takeda, A. : Kurihara Green ICT Project -- Towards Symbiosis between Human's Life and Nature, Journal of Internet Technology (JIT), Vol.12, No.1, pp.1-11(2011).
- 2) 高橋秀幸, 寺邊正大, 中村直毅, 武田敦志, 菅沼拓夫, 橋本和夫, 白鳥則郎: 栗原グリーンプロジェクト - 環境負荷低減型のまちづくりを目指した ICT システムの構想-, 情報処理学会第73回全国大会(平成23年)講演論文集, pp.3-17 - 3-18 (Mar. 2011).
- 3) 稲葉 勉, 小笠原孝志, 関 義則, 高橋秀幸, 菅沼拓夫, 橋本和夫, 白鳥則郎: 栗原グリーンプロジェクトスマートフォンの用いたパークアンドライド支援システム-, 情報処理学会第73回全国大会(平成23年)講演論文集, pp.3-21-3-22 (Mar. 2011).
- 4) 白鳥則郎: 東日本大震災と学会のこれから一会長メッセージ一, 情報処理, Vol.52, No.4・5 (Apr. 2011).  
(2011年5月11日受付)

白鳥則郎 (正会員) norio@shiratori.riec.tohoku.ac.jp

1977年東北大学博士課程修了。1990年同大工学部教授を経て1993年同電気通信研究所教授。2010年東北大学名誉教授、同大電気通信研究所客員教授。公立はこだて未来大学理事。人と情報環境の共生などの研究に従事。文部科学大臣表彰「研究部門」、IEEEフェロー、本会功績賞など受賞、本会会長(2009年5月～2011年5月)。